

A. 小児保健の現状と課題, 提言

悪性新生物からみて

杏林大学医学部小児科
別所文雄

小児悪性新生物(小児がん)の予後の改善に伴い、多くの小児がん経験者は長期生存が可能となっている。その結果、小児の1,000人に1人が小児がんの経験者という時代になりつつある。このことは、小児がん経験者が特殊な個人の存在ではなく、社会のなかで一定の特徴を持った集団として存在するということを意味している。

悪性新生物からみた場合の小児保健上の問題としては、このような集団としての小児がん経験者の特徴に基づいた問題があげられるが、彼らが抱える問題についてはすでに述べたことがある¹⁾ので、ここでは主にこのような患者の保健を保障する、医療を含む社会環境の面から見た問題について検討してみたい。

I. 患者が抱える問題

小児がん経験者の大部分は短・中期的には心身ともに健康な状態にあるとはいえ、さまざまな問題を抱えている経験者も相当数存在することも確かである。さらに、長期的には、年齢が長じるとともに見られるようになる疾患についても、一般人口とは異なった現れ方をする可能性があり、一生に渡る健康管理が大切である。

さらに、家族の一員が小児がん罹患したことによって、患児だけではなく他の家族の成員が抱えることになった問題なども考慮すべき問題である。最近、適切な情報を与えず秘密にしてきたことによって、小児がん経験者が40歳を超える年齢になっても、その秘密を巡ってピリピリした緊張の下に生活している家族がいることに改めて驚く経験をした。今後、

杏林大学医学部小児科

〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2

このような問題についても検討が必要であろう。

II. 小児がん患者を取り巻く医療環境の問題

小児がんの医療の問題点の一つは、これが稀な疾患であるということである。その発生率は小児がん全体でも小児人口1万人に約1人に過ぎないが、個々の小児がんはさらに稀である。たとえば小児がんの中で最も多い白血病でさえ、10万人に3~4人に過ぎない。日本の小児医療提供体制の特徴は、小規模な施設が多数存在していることであるが、これは小児科医の労働条件の観点からばかりでなく、特にこのような稀な疾患については、医療の質の面でも大きな問題である。

ある調査²⁾によれば、年間10名以上の造血器腫瘍を登録している施設で診ている患者の数は全造血器腫瘍患者の2割強に過ぎない。また、別の調査³⁾によると、大学病院に限っても約75%の大学病院では年間5名以下の白血病患児を診ているに過ぎず、日本血液学会の専門医がいるにもかかわらず、年間に診療している新規白血病患児は2名以下という施設も少なくない。

このような状況では、「がん」のように個人差の大きい疾患について十分な経験を積むこと、すなわち目の前に現れたさまざまに条件が違う患者に適切に対応できる知識と技量を蓄えておくことはほとんど不可能である。

この問題の解決のためには、数は少なくとも十分な規模の施設を作り、そこに専門医を多数集めること、すなわち医療提供体制の集約化が必要である。このことにより、医療従事者間の情報交換が十分に行われれば、個々の医療者が変わっても医療団として診療を続けることが可能となるという利点もあ

